

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 24 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381271

研究課題名(和文) 小学校における「ペア学年」を中心とした異年齢集団による交流の研究

研究課題名(英文) A study on Multiage Group Activities in Primary School :Centerd around Activities by pairs of different grades

研究代表者

毛利 猛 (MOURI, TSKESHI)

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：50219961

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)： 小学校における「ペア学年」を中心とした異年齢集団による交流の取り組みの概要とその教育的意義を明らかにするとともに、平成26年度に全国の小学校を対象に実施した調査と平成14年に実施した全国調査との経年比較をしながら、この10年あまりの小学校をめぐる新たな状況変化のなかでの「異年齢集団による交流」の新しい動向 - 「縦割り班」活動の取り組みが全国の小学校に普及していった局面から、ペア学年の活動が普及しつつある局面への転換期に差しかかっているという動向 - とその背後にある子どもと学校の要因を明らかにした。

研究成果の概要(英文)： I surveyed the current state of multiage group activities during primary school age and clarified its pedagogical significance :centered around PEAGAKUNEN activities by pairs of different grades. I performed investigation to make actual trends of multiage group activities in primary school of the whole country in 2014. The following points were made clear from comparison with the similar investigation performed in 2002. In late ten years,activities by pairs of different grades have been rapidly spreading. we are coming to the turning point from the phase TATEWARIHAN activities had spread to the phase PEAGAKUNEN activities is spreading. In the background,there are two factors.One is children's psychological developmental factor. Another is the factor of situational changes going around primary schools.

研究分野：教育学

キーワード： ペア学年 兄弟学級 縦割り班 異年齢集団活動 特別活動

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、子どもたちが放課後や休日に戸外で群れて遊ばなくなるにつれて、彼らの仲間集団のあり方は、大きな変貌を遂げてきた。いまでは、地域における異年齢の遊び仲間集団の自然形成が難しくなっており、小学校のなかで意図的に異学年の仲間集団を組織し、上級生と下級生の交流を図ろうとする取り組みが行われている。

(2) 1年生～6年生で構成された異学年の小グループで、上級生がこのグループのリーダーとなる「縦割り班」活動や、1-6年生、2-5年生、3-4年生というような2学年の組み合わせのなかで、上級生と下級生の一对一の関わりを重視するペア学年・兄弟学級の活動は、子どもの社会性を育成しようとする教師たちの、それぞれの学校の創意工夫を生かした教育活動として、高度経済成長の終わり頃から全国の小学校に徐々に広がっていったものであり、本研究の代表者が平成14年に調査した時点で、「縦割り班」活動は、小規模校を中心に全国のおよそ4分の3の小学校で実践され、ペア学年・兄弟学級の活動は、大規模校を中心に全国のおよそ4分の1の小学校で実践されていた。ところが、こうした小学校における「異年齢集団による交流」の取り組みは、その後、大きな「転換期」を迎えることになった。これに取り組むことの意義はますます高まっているにもかかわらず、学校で実践するための「条件」が急激に悪化していったのである。

(3) こうした小学校をめぐる状況変化のなかで、ペア学年・兄弟学級の取り組みが急速に普及していることは注目に値する。本研究の代表者が、平成23年、24年に香川県および兵庫県の中西播地域で調査したところ、平成14年～23・24年のおよそ10年間で、「縦割り班」の編成率はほとんど変わっていないのに、ペア学年・兄弟学級の編成率は、かなり高くなっていったのである。少し乱暴かもしれないが、小学校をめぐる新たな状況下において、「縦割り班」活動の取り組みが全国の小学校に普及していった局面から、ペア学年・兄弟学級の活動が普及しつつある局面への転換期に差しかかっていると言ってもよいかもしれない。

(4) そこで、「ペア学年」の活動を中心とする「異年齢集団による交流」の取り組みに学問的な光を当てて、「縦割り班」の活動と対比しながら、「ペア学年」の活動の構造と特質、その現代的な意義を根拠づけるとともに、全国の小学校における取り組みの現状（「ペア学年」の編成状況と具体的な活動内容）を調査し、小学校をめぐる新しい状況変化のなかでの、こうした取り組みの成果と実践上の課題について明らかにすることは、きわめて今日的な研究課題であると考えた。

2. 研究の目的

(1) 1年生～6年生から構成された小グループ

で、上級生がグループのリーダーとなる「縦割り班」の活動と、1年生と6年生というような2学年の組み合わせのなかで、上級生と下級生の一对一の関わりを重視する「ペア学年」の活動を比較しつつ、小学校における「異年齢集団による交流」の取り組みの概要とその教育的意義を明らかにするとともに、いくつかの事例校の特徴ある取り組みを紹介する。

(2) 全国の小学校における「ペア学年」「縦割り班」などの異年齢集団の編成状況（地域別、学校規模別の編成率と編成方法）と活動内容（集会活動、当番活動、業間の活動、学校行事などの「ペア学年」「縦割り班」での実施率）を調査し、平成14年度に実施した全国調査との経年比較を行いつつ、この間における「異年齢集団による交流」の全国的な動向と異年齢集団活動に対する担当教員の意識を明らかにする。

(3) 香川大学で学ぶ学生たち（元小学生たち）を対象に行った調査によって、小学校時代の「縦割り班」活動、ペア学年・兄弟学級の活動の経験の有無と、そうした取り組みに対する彼らの意識を明らかにする。

(4) 小学校をめぐる新たな状況変化のなかでの「異年齢集団による交流」の新しい動向 - 「縦割り班」活動の取り組みが全国の小学校に普及していった局面から、「ペア学年」の活動が普及しつつある局面への転換期に差しかかっているという動向 - の背後にある要因を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 「ペア学年」と「縦割り班」というタイプの異なる「異年齢集団による交流」の構造と特質、子どもの社会性の発達にとっての意義について、幅広い関連文献を使った基礎的・理論的な研究を行った。

(2) ペア学年による活動に取り組んでいる高松市立国分寺北部小学校と、「縦割り班」活動とペア学年の活動を組み合わせた取り組みをしている宇多津町立宇多津北小学校を実践事例校として選び、中心的な担い手で教員への研究取材を行った。

(3) 全国の小学校の約2.5%を抽出して、「ペア学年」「縦割り班」といった異年齢集団の編成状況（地域別、学校規模別の編成率と編成方法）とその活動内容などの動向、および「異年齢集団による交流」活動を推進する担当教員の意識を明らかにするためにアンケート調査を実施した。

(4) 香川大学で学ぶ学生たちを対象に、小学校時代の「縦割り班」活動、ペア学年・兄弟学級の活動の経験の有無と、「思い出のなかの異年齢集団活動」に対する彼らの意識を明らかにするための調査を実施した。

(5) 平成26年に行った全国調査と平成14年に行った全国調査の経年比較によって、小学校をめぐる新たな状況変化のなかでの「異年齢集団による交流」の新しい動向と、その背

後にあるもの(子どもの側と学校の側にある要因)に関する分析を行った。

4. 研究成果

(1) 「異年齢集団による交流」の概要と教育的意義

<三つのタイプの取り組み>

小学校における「異年齢集団による交流」には、三つのタイプの取り組みがある。一つは、1年生～6年生で構成された異学年の小グループで、上級生がこのグループのリーダーとなる「縦割り班」活動の取り組み。もう一つは、1-6年生、2-5年生、3-4年生というような2学年の組み合わせのなかで、上級生と下級生の一対一の関わりを重視するペア学年・兄弟学級の活動。そして三つ目のタイプは、子ども会や登校班などの地域ごとの集団を使って活動しているものである。この研究報告では、三つのタイプの「異年齢集団による交流」のうち、おもに「縦割り班」活動とペア学年・兄弟学級による活動を取り上げる。

<学校規模との相性>

三つのタイプの「異年齢集団による交流」には、学校規模との相性(あいしょう)がある。「縦割り班」を編成し、活動している学校の割合は、小規模校になるほど高くなる。逆に、ペア学年・兄弟学級を編成し、活動している学校の割合は、大規模校になるほど高くなる。つまり、「縦割り班」活動は、どちらかという小規模校向きの異年齢集団活動。ペア学年・兄弟学級による活動は、どちらかという大規模校向きの異年齢集団活動である、ということが出来る。地域ごとの集団による活動は、あまり学校規模によらない集団活動である。

<いつ頃から広がったのか>

「縦割り班」活動やペア学年・兄弟学級の活動は、いつ頃から全国の小学校に普及しはじめたのか。「縦割り班」活動は、1970年代の末頃から広がっていったと推測される。1977年の学習指導要領の改訂によって、いわゆる「学校裁量の時間」が創設され、多くの小学校が、この時間を特別活動の充実を図るために活用した。その際、学校における「創意工夫」の一つとして、「縦割り班」活動の取り組みをはじめた学校がかなりあったと思われる。

「縦割り班」活動の普及と比べると、ペア学年・兄弟学級による活動の取り組みはやや遅れて普及しはじめた。ペア学年・兄弟学級の編成率は、この10年あまりで10ポイント以上高くなっている。上級生と下級生の一対一の関わりを重視するペア学年・兄弟学級による活動が、近年、中・大規模校を中心に急速に普及しつつあるのである。

<ペア学年・兄弟学級の組み合わせ>

学年ないし学級の組み合わせは、理論上は全部で15通りある。しかし、実際の組み合わせは、ほとんどの学校が一年と六年の組み合わせ(ペア)を基本にしており、あと2～5

年の組み合わせは、<2-4、3-5>と<2-5、3-4>の2パターンに分かれる。その他の組み合わせのなかには、二つ以上の組み合わせを活動によって使い分けている学校もある。1年と6年の組み合わせ(ペア)が多いということは、教師がこの組み合わせの相性のよさと、このペアによる交流の教育的効果を認めているからである。

<異年齢集団活動の教育的意義>

小学校において「異年齢集団による交流」活動に取り組むことには、どのような教育的意義があるのだろうか。近年、兄弟姉妹の数が減少し、地域における遊び仲間集団も崩壊するなかで、仲間とうまく付き合えない子ども、いわゆる社会性のない子どもが増えている。子どもたちの社会性を育てるうえで、学校において異年齢集団を編成し、異年齢の子どもたちが交流する機会を与えてやることの意義は大きい。

それにしても、異年齢の仲間との交流を、学校で教師たちが意図的に持たせようとするのは、そうたやすい実践ではないはずである。それでも高度経済成長の終わり頃から、この取り組みが全国に広がっていったのは、やはり、今日の子どもの実態、とりわけ彼らの社会性の低下に対して、何とかせねばという教育の必要感が、心ある多くの教師たちを動かしてきたからである。

(2) 2つの小学校における実践事例

高松市立国分寺北部小学校と宇多津町立宇多津北小学校における特色ある「異年齢集団による交流」の取り組みについては、「5. 主な発表論文等」の[雑誌論文]に掲載した両校に対する取材記事を参照。

(3) 小学校をめぐる新たな状況下で「異年齢集団による交流」の動向と担当教員の意識

本研究の代表者は、平成26年に全国の小学校の約2.5%にあたる579校を対象に、「異年齢集団による交流」の取り組みに関する調査を実施した。今回、調査への協力をお願いした小学校は、平成14年12月に実施した全国調査(全国の小学校の4%にあたる940校を『全国学校総覧』より抽出した。)に回答していただいた579校である。調査表の回収数(回収率)は、326校(56.3%)であった。

<「縦割り班」の編成状況>

1年～6年からなる「縦割り班」を編成し、活動している小学校は、回答校326校中の269校で、割合でいうと82.5%であった(図1-1)。平成14年の全国調査の編成率(76.2%、図1-2)よりも高くなっている。「縦割り班」の編成状況を学校規模別にみると、図2に示すとおり、小規模校で「縦割り班」を編成し、活動している割合が高くなる。

<ペア学年・兄弟学級の編成状況>

ペア学年・兄弟学級を編成し、活動している小学校は、回答校326校中の127校で、割合でいうと39.0%であった(図3-1)。ペア学年・兄弟学級の編成率については、平成14年の全国調査と比べて、13ポイントも高くな

っている。

ペア学年・兄弟学級の編成率を学校規模別にみると、図4のとおりである。これを見ると、中・大規模校のほうが小規模校よりも、ペア学年・兄弟学級を編成し、活動していることがわかる。

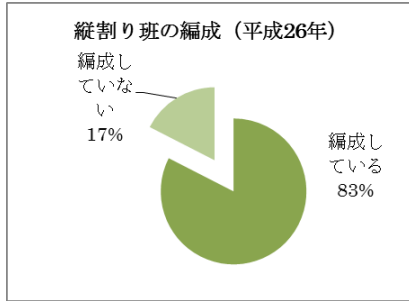


図 1-1

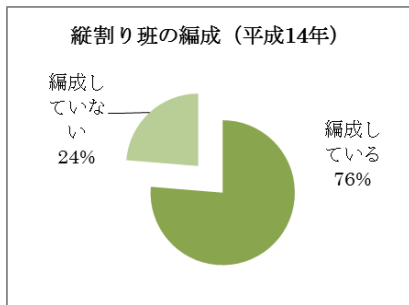


図 1-2

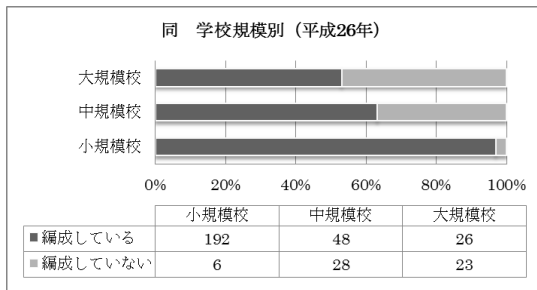


図 2

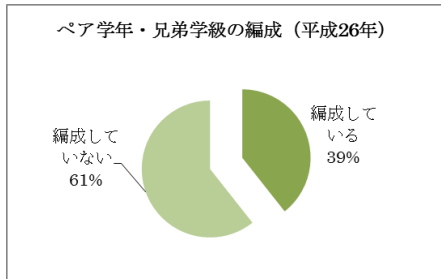


図 3 - 1

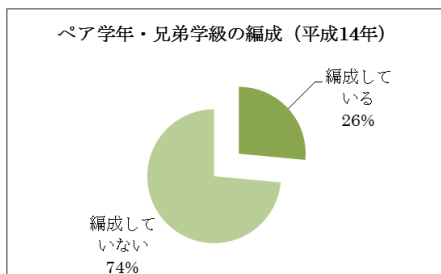


図 3 - 2

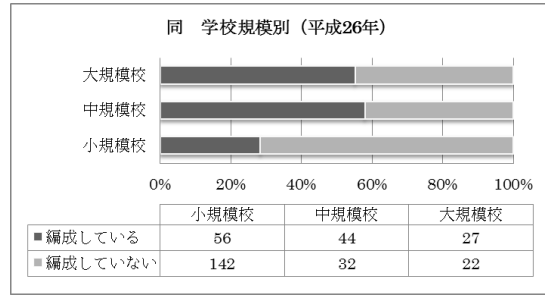


図 4

<活動内容と実施頻度>

「縦割り班」やペア学年・兄弟学級を使って、どんな交流活動を行っているのか。おもな取り組みを一覧表(表1)にまとめてみた。それぞれの活動の実施率は、平成26年の全国調査によるものである。では、それぞれの活動にどれくらいの頻度で取り組んでいるのか。実は、異年齢集団による交流活動のための「時間の確保」が難しくなるなかで、それぞれの活動の実施頻度はそれほど高くない。～の活動のうち、「小集会(ショート集会)」「大集会(ロング集会)」「学校清掃」については、どれくらいの頻度で取り組んでいるかを図5-1～5-3で示した。

表1 「異年齢集団による交流」の分類表

分類	活動内容	実施率
小集会 (ショート集会)	異年齢集団で行う集会活動で、朝の時間や業間などの短い時間(15分程度)で定期的に行われるもの	63.8%
大集会 (ロング集会)	異年齢集団で行う集会活動で、1単位時間以上とって行われるもの(例)レクリエーションやスポーツの大会、季節の集会、1年生を迎える会など	81.6%
学校清掃	異年齢集団で行う学校内の清掃	60.4%
栽培・飼育	異年齢集団で行う栽培または飼育	23.3%
交流給食	異年齢児童が給食を共にする活動	53.7%
集団遊び	昼休みや朝の時間などに意図的に異年齢集団で遊ぶ機会を設定したもの	76.7%
合同遠足	異年齢集団による交流活動を取り入れた遠足	47.2%
運動会	異年齢集団の班対抗の形で得点を競う運動会	44.8%
ボランティア	異年齢集団を活動単位として行うボランティア活動	29.8%
共同学習	異年齢集団による交流活動を含んだ学習(例)生活科の学校探検、総合的な学習の時間での成果に発表など	33.7%

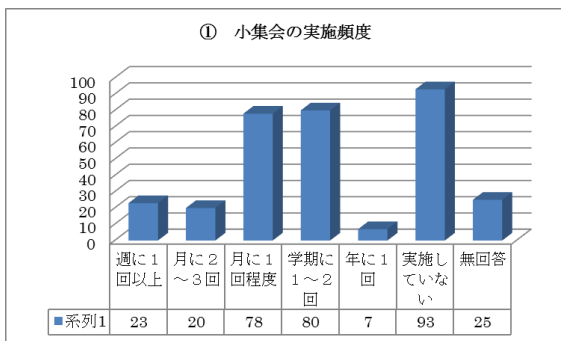


図 5-1 n=326

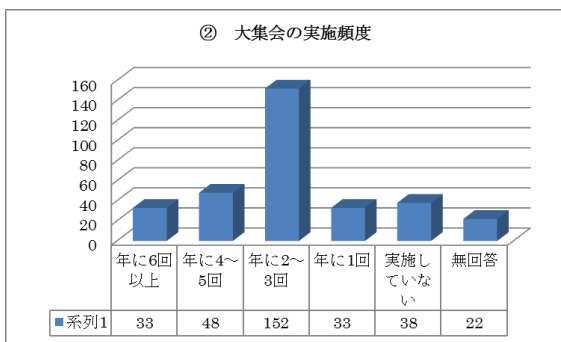


図 5-2 n=326

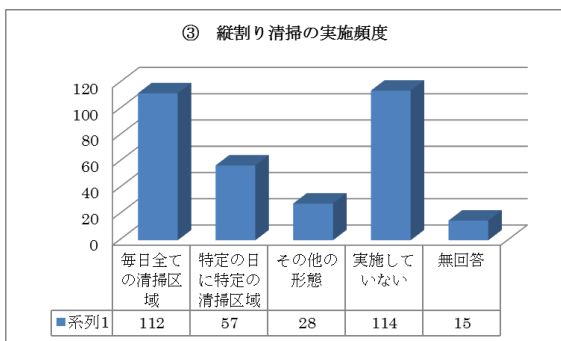


図 5-3 n=326

< 「異年齢集団による交流」の取り組みに対する担当教員の意識 >

全国の小学校の特別活動主任（または担当）の先生方は、(a)勤務校の取り組みの現状をどのように評価し、(b)成果をあげるための要件として何を重視し、さらには(c)異年齢集団活動に取り組む上での「同僚性」「連携する力」および異年齢集団活動の教育的価値と効果をどのように考えているのかを、平成 26 年の全国調査によって明らかにした。(a)(c)の詳細については、「5. 主な発表論文等」の[図書] の第 2 論文を参照。ここでは(b)に関する調査結果を報告する。

小学校における「異年齢集団による交流」の取り組みが、成果をあげるために必要なことは何か。とくに必要だと思われるもの（要件）を選択肢のなかから 3 つ選んでもらった。表 2 を見ると、「異年齢集団による交流」の取り組みが成果をあげるための要件として、過半数の先生方がリストアップしたのは、「異年齢集団による交流」を実施するための時間の確保、「実施に当たっての教員間の意思統一」の 2 項目である。ついで「交流活動への児童の意欲、社会的スキル」、

「教育課程上の明確な位置づけ」の項目を選んだ先生方も比較的多い。

表 2 成果をあげるための要件	回答数（割合）
「異年齢集団による交流」を実施するための時間の確保	227 (69.6%)
教育課程上の明確な位置づけ	131 (40.2%)
実施に当たっての教員間の意思統一	201 (61.7%)
教員の協働意識の高まり、同僚性の構築	50 (15.3%)
新しい交流活動の内容の模索	60 (18.4%)
交流活動の内容の見直し	96 (29.4%)
保護者・地域の理解と協力	22 (6.7%)
管理職の理解とリーダーシップ	4 (1.2%)
交流活動への児童の意欲、社会的スキル	142 (43.6%)
その他	6

(4) 思い出のなかの「異年齢集団活動」

香川大学で学ぶ学生たちは、どれくらいの割合で、小学生時代に「縦割り班」活動やペア学年・兄弟学級の活動を経験したことがあるのだろうか。彼らは、小学校における「異年齢集団による交流」活動の教育的価値をどのようにみているのだろうか。そうした取り組みは、彼らがもし小学校の教師になったら、やってみたいと思えるような教育活動なのだろうか。「生徒指導論 A」という教職科目を受講している学生、および「教育学」という全学共通（学問基礎）科目を受講している学生を対象に、小学生時代の「縦割り班」活動、ペア学年・兄弟学級の活動の有無と、そうした取り組みに対する彼らの意識を調べるための調査を行った。

詳細については、「5. 主な発表論文等」の[図書] の第 3 論文を参照。ここでは「縦割り班」ないしペア学年・兄弟学級による活動経験の有無と、こうした活動に(a)教育的価値があると思うか、(b)教師になったらやってみたいかという質問の回答をクロスさせた集計結果（図 6-1, 2）を報告する。

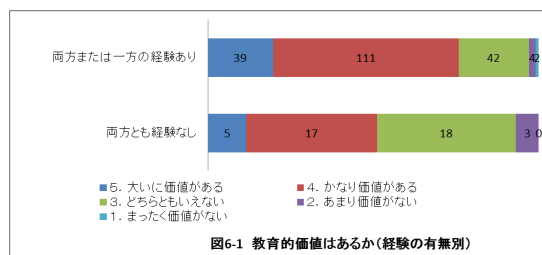


図6-1 教育的価値はあるか(経験の有無別)

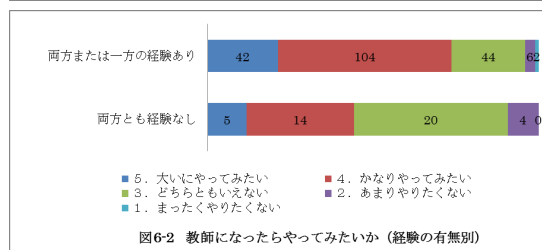


図6-2 教師になったらやってみたいか(経験の有無別)

(5)小学校をめぐる新たな状況変化のなかでの「異年齢集団による交流」

もともと「縦割り班」活動に代表される異年齢集団活動は、小規模校においてよく実践されていた取り組みであったが、近年は、中・大規模校においても無理なく実践できる取り組みとして、ペア学年、兄弟学級による異年齢集団活動が急速に普及している。少し乱暴かもしれないが、小学校をめぐる新しい状況変化のなかで、「縦割り班」活動の取り組みが全国の小学校に普及していった局面から、ペア学年・兄弟学級の活動が普及しつつある局面への転換期に差しかかっていると言ってもよいかもしれない。では、なぜ今、ペア学年・兄弟学級の取り組みが普及しつつあるのか。その背後には2つの要因、子どもの側と学校教師の側に、それぞれの要因があるように思う。

一つは、子どもの心理社会的な発達に関する要因である。上級生がグループのリーダーとなる「縦割り班」と比べて、ペア学年・兄弟学級では、上級生と下級生の一対一の関わりが重視される。どちらが上級生にとっての負担が大きいかは明らかだろう。「縦割り班」活動におけるトラブルの多くは、上級生と下級生がそれぞれの役割 - リーダーおよびフォロアとしての役割 - をうまく果たせないことから生じている。社会性の低下した子どもたちにとって、「縦割り班」活動は、いわばハードルの高い活動になりつつあるのかもしれない。

そもそも、「縦割り班」のなかで期待されている上級生の役割と、ペア学年・兄弟学級という一対一の関わりをなかで期待されている役割は、かなり違っている。一方は、下級生のことを配慮しつつ、集団活動の全体を「仕切る」リーダーとしての役割であり、他方は、よいお兄さん・お姉さんとしての役割である。それぞれの立場で期待される上級生の役割は、重なり合いつつも、かなり違っている。また、この役割を果たすことで育成される社会性についても、そのレベルや中身を問えば、実は、微妙に異なるものである。言ってみれば、一対一の関係のなかで6年生が1年生に頼られ、彼らの世話をすることで身につける力や自信は、異年齢集団のリーダーとしての経験を通して身につける力や自信とくらべて、社会性のより基礎的な部分に関わっているように思う。

もう一つは、学校教師の側の要因である。「縦割り班」活動における教師の指導性は、上級生(リーダー)が集団を動かせるように「導く」という「間接的」な指導にならざるを得ない。この関与の仕方が難しい。とくに荒れている学校で、上級生が上級生らしい役割を果たせていない場合はなおさらそうである。先ほど、社会性の低下した子どもたちにとって、「縦割り班」活動は、いわばハードルの高い活動になりつつあるのかもしれないと述べたが、多忙感を強めている教師に

とつても、「高度な指導性」の発揮が求められ、何かとトラブルの多い「縦割り班」活動は、ペア学年・兄弟学級の取り組みと比べて、いわばハードルの高い活動になりつつあるのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3件)

毛利 猛、六年生一人ひとりが全校をリードする異年齢集団による交流の現状と意義、小六教育技術、10月号、4-7頁、2014年、査読無

毛利 猛、米澤広志、なかよしペア活動 - ペア学年による異学年交流の実践、小六教育技術、10月号、10-11頁、2014年、査読無

毛利 猛、宮野真也、なかよしペア活動となかよしグループ活動の組み合わせによる異学年交流、小六教育技術、10月号、12-13頁、2014年、査読無

〔学会発表〕(計 1件)

毛利 猛、小学校をめぐる新たな状況下での「異年齢集団による交流」、関西教育学会第67回大会、平成27年11月15日、仏教大学(京都府・京都市)

〔図書〕(計 1件)

毛利 猛、小学校における『ペア学年』を中心とした異年齢集団による交流の研究、平成26-28年度科学研究費補助金研究成果報告書、2017年、65頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

毛利 猛(MOURI TAKESHI)

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：50219961